

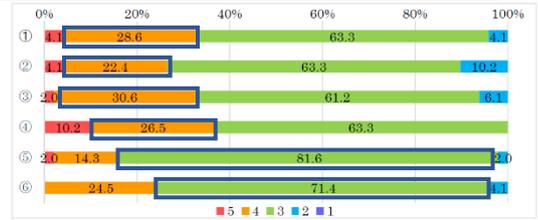
第5節 SSH中間評価において指摘を受けた事項のこれまでの改善・対応状況研究開発の課題

1 中間評価の結果

これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる。

2 中間評価における主な講評を受け、改善・対応状況と研究開発の課題

文部科学省令和3年3月9日2初教課第33号「SSH中間評価(平成30年度指定)の結果について(総括)」より引用。項目別評価の本校評価を右図「枠囲い」で、講評(一部抽出)に対する改善・対応状況を示す。



項目	改善・対応状況と研究開発の課題
<p>① 研究計画の進捗と管理体制、成果の分析に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 各校務分掌の視点から生徒を支援できるようになっている。 中高一貫校として全校体制での充実したSSHの活動を行っている。 新型コロナウイルスの感染拡大への迅速な対応を可能にした学習管理システムの活用は、評価できる。 SSHの成果は、量的調査と質的調査に分け、様々な指標から、生徒及び教師の変容の分析に取り組んでいる。ただし、教師の意識の変容は、必ずしも十分に測定できていないのではないか、吟味することが望まれる。 	<p>改善・対応状況と研究開発の課題</p> <p>教師の意識の変容について、量的調査①探究の指導経験の変容、質的調査②授業の変容、③探究指導の2つの側面から調査実施。ポートフォリオ分析から本校生徒の重点改善項目となる資質・能力の要素を抽出した。(㉓本文第5節実施の効果とその評価、㉔関係資料参照)</p>
<p>② 教育内容等に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ロジックアセスメント」や「問いを創る授業」など、特色ある研究計画を着実に進めており、評価できる。 授業で創られた探究の「問い」の一覧の活用は、評価できる。 SS課題研究の指導方法を類型化したことも、他校の参考になる。 ロジックリサーチやブレ課題研究など、探究的な学習活動に係る取組が積極的に行われており、評価できる。 第1学年にテーマ設定を2回トレーニングするシステムは評価できる。 年間を通して、診断的評価、形成的評価、総括的評価の流れで評価計画を立てている。そのための手法として、ルーブリックやチェックリストなどを開発している。 探究のためのガイドブック等を開発している。ロジックガイドブックの有用性についてGSコースの低評価の原因は何か、吟味することが望まれる。 	<p>改善・対応状況と研究開発の課題</p> <p>生徒対象SSH事業に関するアンケート(質的調査)の結果をポートフォリオ分析し、研究開発の仮説を総合評価に設定し、個別評価要素の重要度指標と満足度指標を得て、重点的改善要素を抽出したことで、生徒に必要な学習内容、企画に優先的に取り組むことができ、独自開発教材ロジックガイドブック(19)第二版製本、GS本(20)2022版と改訂版を運用することができている。</p> <p>(㉕本文第5節実施の効果とその評価、㉖関係資料参照)</p>
<p>③ 指導体制等に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 校長のリーダーシップの下、特色ある科目等と連動した全校的な指導体制が見られる。各学年・各コースの探究活動を支援するための全校体制が構築されている。 トップ支援型とボトムアップ型の双方の充実を図るよう研究主任配置と学年を中心とした運営を進める全校体制を構築しており、評価できる。 教科とUTO-LOGICとの関連を高める授業研究と職員研修を精力的に実施している。3人一組の教科を越えた授業研究は、評価できる。 生徒1人につき1テーマを設定するロジックリサーチを全教員で分担して個別指導する体制を構築しており、評価できる。 全教科で探究をベースにした取組を行っており、教員の連携体制も良く構築している。教科の視点を探究の指導で生かすワークショップ型職員研修は、評価できる。 各種学会参加と課題研究担当者会議(週時定)での共有で教員の力量を高めている。 SSコースとGSコースの両方が組み込まれた指導体制がとられ、企業や大学、研究機関との連携が積極的に行われている。 	<p>改善・対応状況と研究開発の課題</p> <p>各学年・各コースの探究活動を支援する前項体制が構築できた半面、ロジックリサーチ、ブレ課題研究、SS課題研究、GS課題研究と多様なテーマの指導が求められる現状の課題に対応するため、Google共有ドライブに探究に関係する資料、生徒が探究する成果物等をすべてアップロードし、関係教員と対象生徒が協働的に扱うことができる体制を構築し、オンライン上ですべての教員が生徒に関わることができ、その内容を可視化できる運用を確立することができた(㉗本文テーマⅡ参照)。SSH研究推進委員会(32)や研究開発部(33)、課題研究担当者会議(37)で進捗状況の共有に時間を割くことなく、現状の課題や今後の方向性に重点を置いた会議を運営することができている。</p>
<p>④ 外部連携・国際性・部活動等の取組に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際発表経験者、学会発表経験者が相当数にのぼっており、高度な課題研究を進めたことは、評価できる。 GS課題研究では、市役所各課との連携などによって、効果を上げている。国内外の科学技術系コンテストに積極的に参加し、多数受賞しており、評価できる。 ウトウトタイムやペーパーブリッジコンテストなど、自校独自の探究活動を産学官と連携しながら実施しており、評価できる。 	<p>改善・対応状況と研究開発の課題</p> <p>宇土市連携・研究発表会を開催し、宇土市長賞を目標に取り組むGS課題研究の方向性を構築した。また、NHK BS1 Cool Japanで紹介されたウトウトタイム(29)や朝日新聞EduAに掲載されたペーパーブリッジコンテスト(28)など成果の発信ができた。(㉘本文テーマⅢ参照)</p>
<p>⑤ 成果の普及等に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ロジックスーパープレゼンテーション開催は、評価できる。 公開授業に多くの教育関係者を受け入れており、評価できる。 多数の教育関係者の視察や、研修やセミナーの講師依頼、メディアの取材などを通して、研究成果の普及と発信に積極的に取り組んでいる。 多くの参加者を得た探究の「問い」を創る授業公開及び授業研究会は、評価できる。 	<p>改善・対応状況と研究開発の課題</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の公開授業を実施。探究の「問い」を創る授業の公開を7月、3月の2回行い、100人超の教育関係者を集めた。(㉙本文テーマⅠ参照)</p>

第6節 校内におけるSSHの組織的推進体制

①学校全体の校務分掌との関連を含めた組織図



②組織的推進体制の工夫と成果

今年度の成果は、第Ⅱ期 SSH 研究推進委員会では SSH 研究開発の方向性の議論を、研究開発部では SSH 事業推進の連絡調整を、課題研究担当者会議では課題研究に関する情報共有と、各会議の役割を明確にした推進体制ができたことである。研究開発部長が総括する研究開発部は、SSH 研究主任が SSH 主対象生徒への事業、GS 研究主任が SSH 主対象以外生徒への事業、GLP 研究主任が U-CUBE, GLP 事業、ICT 研究主任が 1 人 1 台端末事業を推進するにあたって、高校・中学の学年主任と連絡調整を図る会議として、週時程で水曜 5 限に実施をした。第Ⅱ期 SSH 推進委員会では、各校務分掌の代表の視点から SSH 事業の方向性を検討する場として、研究開発の成果や課題、今後の方向性について週時程で月曜 5 限に実施をした。さらに、今年度は学校経営戦略部を設置し、学校長のリーダーシップのもと学校の現状における成果や課題を顕在化させ、学校経営の戦略を練る会議を週時程で木曜 5 限に設定した。課題研究担当者会議は、SSH 主対象生徒が取り組む課題研究の指導にあたる数学、理科の教員が情報交換する会議であり、週時程で木曜 6 限に実施をした。

③SSH担当以外の教師の理解や協力を得るために行った取組、研究開発計画の推進管理のために行った取組

SSH推進に関わる部署等の学校組織上の位置付けや具体的な役割分担

SSH 研究開発計画のテーマⅠ「探究の「問い」を創る授業」について、探究の「問い」を創る授業に関する職員研修や公開授業、実践発表会、3 人 1 組教科の枠を越える授業研究⁽³⁶⁾（テーマⅠ「探究の「問い」を創る授業」の該当頁参照）を行うことで、様々な教科が探究の「問い」の設定やシラバス開発・評価研究に取組み、教科横断型授業の視点や気付きを促す機会を充実させることができています。

SSH 研究開発計画のテーマⅡ「教科との関わりを重視した探究活動」について、ロジックリサーチ⁽⁴³⁾における全職員 OJT(On the Job Training)での指導力を向上する機会の設定、GS 課題研究における指導体制の構築、生徒とともにルーブリック作成ワークショップに参加する機会の設定など研修の充実を図ることができています。

SSH 研究開発計画のテーマⅢ「社会と共創する探究」について、U-CUBE を拠点に GLP 研究主任が英語で科学・グローバル講座・同時通訳講座⁽²⁷⁾をはじめ、英語研究発表支援、留学支援等、様々なグローバル教育を展開することができています。産・学・官連携による社会との共創プログラムでは、様々な教科で外部連携による事業展開ができています。

研究開発計画の推進管理のために行った取組では、共有ファイル（カレンダー）に業務（内容・時期・進捗状況）を記入し、共有することによって、推進管理を図ることができた。

④運営指導委員会の体制

(1) 令和4年度の運営指導委員会のタイムスケジュール

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
内容	委員依頼公文発出 研究開発実施報告書	申請概要相談	日程調整	第1回 運営指導委員会								

(2) 令和4年度の運営指導委員会の委員

氏名	所属	委員歴
松添 直隆	熊本県立大学環境共生学部 教授 委員長	第1期第1年次 (H25) ~現在 10年目
元松 茂樹	宇土市長	第1期第1年次 (H25) ~現在 10年目
加藤敬一郎	宇土市役所企画部長	第2期第5年次 (R04) ~現在 1年目
宇佐川 毅	熊本大学理事	第1期第4年次 (H28) ~現在 7年目
齊藤 弘順	崇城大学大学院工学研究科 教授	第2期第5年次 (R04) ~現在 1年目
堤 豊	熊本学園大学商学部経営学科 教授	第2期第4年次 (H25) ~現在 2年目
齊藤 貴志	名古屋市立大学大学院医学研究科 教授	第2期第1年次 (H30) ~現在 5年目
田中 和恵	熊本県立教育センター教科研修部理科研修室 指導主事	第2期第4年次 (R03) ~現在 2年目

(3) 運営指導委員会の本校出席職員

校長, 高校副校長, 中学副校長, 教頭, 事務長, 学校経営戦略部 (総務図書情報部長, 教務主任, 中学代表) 研究開発部長, 進路指導主事, SSH 研究主任, GLP 研究主任, GS 研究主任, 実習教師